

# 補足的内容を伴う連用形接続

—農学系論文を対象として—

中 村 純 子

キーワード：農学系論文、連用形接続、独立性、補足的内容

## 要旨

連用形接続は、シテ形接続に比べて前項と後項の独立性が高い。しかしこのことは前項と後項に意味的連関がないことを意味しない。本稿では連用形接続において、前項が後項に補足的内容を伴う用法を農学系論文において調査・分析した。その結果、前項と後項が判断→根拠、総括的→部分的、概括的→具体的の関係で結ばれているものがあることが分かった。とくに判断→根拠、総括的→部分的は調査などのデータの分析の記述に用いられており、調査系の論文には多く見受けられる用法だと思われる。

## 1. はじめに

留学生が論文を読解する際、困難を生じる原因の一つに複文・重なり文の存在がある。中でもシテ形・連用形接続は、それ自体は何の意味も表さず、その意味は前項・後項の意味的關係により決定されること、また意味・用法が多岐にわたることから、その解釈に困難があると考えられる（以後、連用形の含まれる前件を前項、後件を後項と呼ぶことにする）。論者が農学系論文の文末表現の調査をした際<sup>1)</sup>、そこにシテ形・連用形接続、とくに連用形接続が多く観察された。しかし、従来行われている研究は、小説・随筆を調査対象にしたものが多く、論文を対象とした調査・研究は管見の限りでは見当たらない。それゆえ、本稿では論文における連用形接続に焦点を当て、調査、分析することにする。

連用形接続はシテ形接続に比し、独立性が高いことは森田(1982)、奥田(1989)、言語学研究会・構文グループ(1989)、新井(1990)らによって指摘されている。しかし、このことは前項と後項に意味的な繋がりが無いことを意味しない。本稿では前項と後項が独立性・同存性を保っている上で並列<sup>2)</sup>の用法に近いが、前項が後項に補足的内容を伴う連用形接続について、その意味的關係、言語的特徴、構文的特徴を考察することを目的とする。また、このような連用形接続が論文において、どのような場面で用いられているかについても言及する。

## 2. 先行研究

連用形接続の一般的用法については森田（1982：133-134）がシテ形と比し、まとめている。並列〔含対比〕・順序などの用法は、連用形、シテ形接続の両接続から生じ、同時進行、原因・理由についてはシテ形接続からのほうがより自然に生じ、手段・方法などは、シテ形接続のみから生じるとしている。

しかし、論者は農学系論文の連用形接続を観察していて、上記の用法のどこにも属さないような用法を発見した。独立性が高く、同存性があることで、並列に近い用法かと思われるが、前項が後項に補足的内容を伴う下記のような用法である。（焦点のあたっている連用形と後項の述語はゴシック体を使用）。

- a. 全体としては「農村景観」が最も高く **50.3% (77人)** であり、次いで「マツタケ生産」が42.5% (65人)、「災害防止・水源涵養」が41.2% (63人)、「レクリエーション」が33.3% (51人)、「宅地開発」が21.6% (33人)、「放置」が16.3% (25人)であった。（居住者）
- b. まず、居住年数に関しては、「よく知っている」のは「新住民層」が23.5%（4人）であったのに対し、「定住層」は**69.2% (90人)** であり、とくに「30年以上」の76.1% (67人)が「よく知っている」を選択していた。（居住者）
- c. 本稿では年齢層を大きく2つに区分し、「青壮年（25～29歳）」と「高齢者（60歳以上）」に区分した。（居住者）

このような意味関係のシテ形・連用形接続を分析した研究に白川（1990）と吉田（1996）の研究をあげることができる。白川（1990）は独立性の高いシテ形・連用形接続をあげ、前項と後項の関係を一般的→具体的、結論→根拠、難解な表現→平易な表現としてまとめている。また吉田（1996）はシテ形に関してのみであるが、前項が後項に補足的内容を伴う用法を「言い換え前触れ」と名づけ、その関係を、評価的→記述的、判断的→現象的、概念的→内容限定的の3つに分類している。

白川（1990）と吉田（1996）の研究は調査の対象が小説・随筆である点、また連用形接続に焦点をあてたものではない点で本稿とは異なっている。

4節以降、前項が後項に補足的内容を伴う連用形接続について、その意味的關係、言語的特徴、構文的特徴を記述していく。

### 3. 調査方法

本調査にあたって森林経営の分野から5つの論文を選択した。（2）を除くいずれも調査を基に書かれた論文である。使用した学術雑誌は「日本林学会誌」、「森林計画誌」である。具体的な論文名およびその略称を以下に記す。なお、本稿における例文引用に際して

は、この略称を使用する。

- (1) 山場淳史・中越信和 (1999) 「居住者属性からみた里山利用・管理に関する意識構造」『日本林学会誌』第 81 (2) 以後 (居住者) と記す。
- (2) 廣嶋卓也 (1999) 「線形計画法による持続可能な森林経営の目標設定－モニタリング・プロセスの基準・指標を事例として－」『日本林学会誌』81 (3) 以後 (線形) と記す。
- (3) 松本美香・泉英二・藤原三夫 (2000) 「森林・林業に対する公的助成の地域経済波及効果の計測－愛媛県久万町を事例として－」『日本林学会誌』第 82 (1) 以後 (森林) と記す。
- (4) 大住克博・森麻須夫・桜井尚武・斎藤勝郎・佐藤昭敏・関剛 (2000) 「秋田地方で記録された高齢なスギ人工林の成長経過」『日本林学会誌』82 (2) 以後 (秋田) と記す。
- (5) 吉田茂二郎・松下浩司 (1999) 「民有林の林分収穫表の特性について」『森林計画誌』33 以後 (民有林) と記す。

上記の論文に使われていたすべての連用形接続を分析し、独立性・同存性を保ちつつ、前項が後項に補足的内容を伴う連用形接続を抽出し、分析を加えた。なお、その際、複合助辞と判断されるものは扱わなかった。

#### 4. 結果と考察

後項に前項の補足的内容を伴う連用形接続を分析した結果、前項と後項に判断→根拠、総括的→部分的、概括的→具体的という意味的連関が見出せた。これらはいずれも前項が抽象的であり、後項が具体的なものである。さらに判断→根拠、総括的→部分的〔特筆型〕においては、前項の述語にある特徴があることが分かった。前項が「形容詞」、または「名詞＋である」が多いということである。白川 (1990:235) は、シテ形・連用形接続において前項の述語が 1) モダリティを表す助動詞 (の一部) (ようで、らしくなど)、2) 判断形容表現 (ある種の形容詞、名詞＋ダ)、3) 「ある」、「いる」の場合、独立文とほぼ同等の完結性を備えた文になりやすいことを指摘している。論者が調査した農学系論文に見られた前項が後項に補足的内容を伴う連用形接続は、ほとんどは白川 (1990:235) のいう 2) に該当しており、独立性が高いということである。白川 (1990:237) は「このようなテ形・連用形で接続された前件と後件とは、同一の文に納まっていながら、前件は主観的な判断表明、後件は客観的事実報告と言う具合にそれぞれ独立した主張をしており、後半を待たず前半だけで、既に独立した文と同等の主張がおこなわれている」としている。以下、個々の意味的關係についてさらに詳しく述べていく。

##### 4-1. 判断→根拠

前項と後項が判断→根拠の関係の例をみていく。これは、白川（1990）の結論→根拠、吉田（1996）の判断的→現象的と平行する。

（1）、（2）、（3）、（4）では前項の述語が形容詞の「高い」、「低い」、「遅い」で終わっており、これは草薙（1978:94-96）のいう「比較形容表現」にあたる。「比較形容表現」とは常に何かと比べて表現するもので、絶対的なものではない。情報提供者がなんらかの条件を考慮に入れて、その基準で選ぶものであり、「高い」、「低い」、「早い」、「遅い」などがこれにあたる。そしてここでいう「なんらかの条件」とは、「情報提供者の外に本来存在するものである」としている。つまり、判断→根拠では前項において比較形容表現で判断を表し、後項でその比較表現を選んだ条件を、データを示すことによって明示し、判断の根拠の客観化をはかっているということである。（1）では、まず、前項において「農村景観を（選んだ人の割合が）最も高い」と判断し、後項でそれを裏付ける客観的なデータを記している。（2）は前項で「平均樹高が極めて高い」と判断を下し、やはり後項でその客観的データを記している。（3）では、まず、前項において「（樹高が）やや低い」と判断をし、後項においてその客観的データを記している。（4）では前項において「伐木平均成長量が極大になる時期は最も遅い」と判断を下し、後項でその具体的データを記している。これらの例はいずれも何らかのデータの結果を記す時に特徴的に現れており、論文においてよく見られるパターンであると思われる。

（1）全体としては「農村景観」が最も高く 50.3%（77人）であり、次いで「マツタケ生産」が42.5%（65人）、「災害防止・水源涵養」が41.2%（63人）、「レクリエーション」が33.3%（51人）、「宅地開発」が21.6%（33人）、「放置」が16.3%（25人）であった。（居住者）

（2）これらの高齢級の試験地では平均樹高が極めて高く 40mに近かったが、周囲は既に樹高の低い若齢林分に切り替わっていたため、被害がより大きくなったものと考えられる。（秋田）

（3）樹高はほとんどの処理区で、ほぼ秋田地方すぎ林収穫表の地位1等の値に沿って伸びていて、90年生で40m前後に達していた。羽根山試験地の二つの調査区ではやや低く、地位1等と2等の中間であった（図-6）。（秋田）

（4）伐木平均成長量が極大になる時期は国内各地の収穫表の中でも最も遅く、林齢100年においても明瞭な低下は起こさない。（秋田）

前項の述語が「よい」という草薙（1978：96-97）のいう「判断形容表現」にあたる形容詞を使用した（5）のような例もあった。「判断形容表現」は「比較形容表現」と相違

し、判断の基準が情報提供者個人にあることで基準を客観的に表すことができないことから主観的だとされている<sup>3)</sup>。しかし本稿の調査対象の論文に使用されていた例の「よい」は、比較形容表現に近い使い方であり<sup>4)</sup>、さらに後項に客観的データが添えられていて、判断の客観化がはかられている。また(6)、(7)は前項の述語が「名詞+である」であり、表現主体の断定的判断と考えられる。しかし、この表現も(6)は「積極的肯定を選択した割合が最も低かったのは「専門・事務職」であり…」は「専門・事務職」が積極的肯定を選択した割合が最も低く…」、(7)は「職業の中で最も高かったのは「農林業従事者」であり…」を「農林業従事者」が職業の中で最も高く、…」と言いかえることも可能であり、前項が情報提供者の客観的基準に基づいた判断、後項がそれを裏付けるデータという意味的關係は変わりないと思われる。

白川(1990)の結論→根拠では「判断形容表現」が使用されていたが、本調査では主に「比較形容表現」が使われていた。比較形容表現+客観的データのパターンは表現主体の判断を調査・実験の客観的データとともに記すにふさわしい表現であり、小説・随筆等よりも論文に使用されやすいと思われる。

(5) リチャーズ成長関数を当てはめた結果は非常に当てはまりが良く、寄与率は最低でも0.955で、半数以上が0.999以上であった。(民有林)(同様例他2)

(6) 一方、積極的肯定を選択した割合が最も低かったのは「専門・事務職」であり、選択したのは1人(3.4%)であった。(属性)

(7) 職業の中で最も高かったのは「農林業従事者」であり、その35.0%〔7人〕が該当した。(属性)

前項と後項の独立性が高いか低いかは前項と後項の入れ替え可能かどうかで確かめることができる。判断→根拠の例は下記のように入れかえることは可能である。しかし前項と後項を入れかえると、判断→根拠と逆の根拠→判断となってしまう、意味的關係がずれていく。これは前項と後項に意味的連関があることの証左でもあると思われる。

'(1)全体としては「農村景観」が50.3% (77人) であり、最も高く、…(居住者)

'(2)これらの高齢級の試験地では平均樹高が40mに近く、極めて高かったが、…(秋田)

'(3)…羽根山試験地の二つの調査区では、地位1等と2等の中間であり、やや低かった(図-6)。(秋田)

'(4) 林齢100年においても明瞭な低下は起こさず、伐木平均成長量が極大になる時期は国内各地の収穫表の中でも最も遅い。 (秋田)

'(5) 寄与率は最低でも0.955で、リチャーズ成長関数を当てはめた結果は半数以上が0.999以上であり、非常に当てはまりが好かった。 (民有林) (同様例他2)

'(6) 一方、選択したのが1人(3.4%)であり、積極的肯定を選択した割合が最も低かったのは「専門・事務職」であった。 (属性)

'(7) 35.0%〔7人〕が該当し、職業の中で最も高かったのは「農林業従事者」であった。 (属性)

#### 4-2. 総括的→部分的

前項と後項の意味的關係が総括的→部分的なタイプである。特筆型と例示型に分かれた。

##### 4-2-1. 総括的→部分的〔特筆型〕

「特筆型」は前項と後項の意味的關係が総括的→部分的なタイプであり、前項と後項が「とくに」、「前者・後者」などの語句で結ばれるものである。これは論文においては(8)、(9)のようにアンケート等の結果を示す時の文型として特徴的に見られるパターンだと思われる。

言語学研究会・構文グループ(1989:176-177)は、「前項が複数主体をめぐって、後項がそのうちの一つの主体をめぐって、出来事を描きだしている連用形接続(用語は論者が改変)がある」ことを指摘している。更に「連用形接続にこのようなことが可能なのは、それぞれの主体が互いに相対的な独立性を保っているからである」としている。言語学研究会・構文グループのこの分析は動詞述語についての記述であるが、「名詞+である」でも同様のことが言えそうである。(8)では、前項は複数主体である「定住層」について記述し、後項の主体はそのうちの一部「30年以上(の定住層)」で、以下その層について記述している。(9)では前項において「家族従業・パート・主婦・無職」の36.8%(21人)」という複数主体について記述し、後項でそのうちの一部の「この層の12.3%(7人)」について記述している。(10)の場合も前項の主体は「補助事業」であり、まずその補助事業が2つに分かれることを記述し、後項はその2つに分かれた「補助事業」の一つ「産地形成型林構の施設整備事業」を主体にして、それについて記述している。

(8) まず、居住年数に関しては、「よく知っている」のは「新住民層」が23.5%(4人)であったのに対し、「定住層」は69.2%(90人)であり、とくに「30年以上」の76.1%(67人)が「よく知っている」を選択していた。 (居住者)

(9)職業との関連では、「家族従業・パート・主婦・無職」で、最も参加意識が低い。すなわち「家族従業・パート・主婦・無職」の36.8% (21人)が否定的回答であり、とくにこの層の12.3% (7人)が積極的否定 (「参加しないだろう」)の意識をもっている。(居住者)

(10)活性化センターが96年度に受託した補助事業は、上浮穴郡を対象とした各林構事業での会議および付帯事務等と、産地形成型林構の施設整備事業であり、後者の事業には(株)いぶきへの補助金の再配分も含まれていた。(森林)

この型は2つに区切って、独立文にしても全く問題がなく、独立性は高いと言える。( '(8)、'(9)、'(10)参照) しかも言語研究会・構文グループ (1989: 176-177) が示唆しているように相対的に独立性が低いシテ形に入れ替えるとやや不自然になる (?"(8)、?"(9)、?"(10)参照)。

'(8)まず、居住年数に関しては、「よく知っている」のは「新住民層」が23.5% (4人)であったのに対し、「定住層」は69.2% (90人)である。とくに「30年以上」の76.1% (67人)が「よく知っている」を選択していた。(居住者)

'(9)職業との関連では、「家族従業・パート・主婦・無職」で、最も参加意識が低い。すなわち「家族従業・パート・主婦・無職」の36.8% (21人)が否定的回答である。とくにこの層の12.3% (7人)が積極的否定 (「参加しないだろう」)の意識をもっている。(居住者)

'(10)活性化センターが96年度に受託した補助事業は、上浮穴郡を対象とした各林構事業での会議および付帯事務等と、産地形成型林構の施設整備事業である。後者の事業には(株)いぶきへの補助金の再配分も含まれていた。(森林)

?"(8)まず、居住年数に関しては、「よく知っている」のは「新住民層」が23.5% (4人)であったのに対し、「定住層」は69.2% (90人)であって、とくに「30年以上」の76.1% (67人)が「よく知っている」を選択していた。(居住者)

?"(9)職業との関連では、「家族従業・パート・主婦・無職」で、最も参加意識が低い。すなわち「家族従業・パート・主婦・無職」の36.8% (21人)が否定的回答であって、とくにこの層の12.3% (7人)が積極的否定 (「参加しないだろう」)の意識をもっている。(居住者)

?"(10) 活性化センターが96年度に受託した補助事業は、上浮穴郡を対象とした各林構事業での会議および付帯事務等と、産地形成型林構の施設整備事業であって、後者の事業には(株)いぶきへの補助金の再配分も含まれていた。(森林)

このように、前項と後項は独立性が高いことが言えるが、下記のように、多少ことばを補ったり、省いたりしても前項と後項は入れ替えが不可能である。これは特筆という性格上、前項の内容すべてを後項で言いかえているわけではなく、かつ前項の内容が前提で後項の特筆という意味自体が成り立つことに起因していると思われる。前項と後項との入れ替えは不可能であることから、独立性、同存性を保ちながら、やはり並列とは一線を画した用法であるといえる。

?"(8) まず、居住年数に関しては、「よく知っている」のは「新住民層」が23.5% (4人)であったのに対し、(定住層は)「30年以上」の76.1% (67人)が「よく知っている」を選択しており、69.2% (90人)であった。(居住者)

?"(9) 職業との関連では、「家族従業・パート・主婦・無職」で、最も参加意識が低い。この層の12.3% (7人)が積極的否定(「参加しないだろう」)の意識をもっており、36.8% (21人)が否定的回答である。(居住者)

?"(10) 産地形成型林構の施設整備事業には(株)いぶきへの補助金の再配分も含まれており、活性化センターが96年度に受託した補助事業は上浮穴郡を対象とした各林構事業での会議および付帯事務等と、産地形成型林構の施設整備事業であった。(森林)

この型は論者の調査した論文では、前項が「名詞+である」で終わっており、まず表現主体が断定的に判断を下し、後項で特筆することを述べているという型である。しかしサンプル数が少なかったため、このことについては更に精査を要する。

#### 4-2-2. 総括的→部分的〔例示型〕

例示型は前項で概念的に事柄を述べ、後項でその具体的なあり様を述べるパターンである。これは白川(1990)の一般的→具体的に平行する。このパターンは前項と後項を「たとえば」などで結ぶことが出来るタイプである。後項で記されていることは、前項の事柄の一部であって、すべてではない点で特筆型と通じるところがある。特筆型と異なっている点は、後項は前項で記述されていることの典型的例であるという点である。特筆型では後項には前項に記述されていることの中から特に特徴の著しいもの、または記述する必要があるものが取り上げられ、記述されている。



(11)、(12) の例は前項と後項の間に、何も記されていないが、その意味的關係から「たとえば」を入れることができる。(11) では前項で「線形計画法が古くより森林計画分野で利用されている」と概括的に記述し、後項でその例をあげている。線形計画法を利用した例は他にもあると思われる。(12) は前項で定期平均成長量は各区ともに高い値を示したことを述べ、後項でその例として高齢林の定期平均成長量も高かったことをあげている。

(11)線形計画法とは、限られた「資源」を競合する諸々の「活動」に対し最適に分配するための方法であり、林業を含めた様々な経営上の問題を解決するために用いられている。この手法は古くより森林計画分野で利用され、木材生産の保続を考慮するモデル(南雲・箕輪、1967)に始まり、近年では目標計画法(佐野・坂本、1998)やファジイ計画法(野上、1991)などを用いて森林の多面的利用を考慮するモデルが現れた。(線形)

(12)定期平均成長量は各区ともに高い値を示し、林齢60年生以降も年間16~27m<sup>3</sup>/haを維持していた。(秋田)

このパターンは同存性があること、下記のように前項と後項を入れ替えてもほとんど意味が変わらない、つまり独立性が高いことが構文的特徴と言えよう。この意味で並立の用法と近いと言えるが、前項と後項は総括的→部分的という意味関係で結ばれている点で、やはり並列とは一線を画す用法であると思われる。このパターンの使用が本調査では2例しか見られなかったことから、前項にどのような述語が使われやすいのかを含めて、更に精査を要する。

'(11)…この手法は、木材生産の保続を考慮するモデル(南雲・箕輪、1967)に始まり、近年では目標計画法(佐野・坂本、1998)やファジイ計画法(野上、1991)などを用いて森林の多面的利用を考慮するモデルが現れ、古くより森林計画分野で利用された。(線形)

'(12)定期平均成長量は、林齢60年生以降も年間16~27m<sup>3</sup>/haを維持しており、各区ともに高い値を示した。(秋田)

#### 4-3. 概括的→具体的

このパターンは前項が概括的、後項が具体的という意味的關係にあるものである。白川(1990)のいう、難解な表現→平易な表現と平行する。総括的→部分的と相違し、後項は前項の一部ではない。(13) では前項でまず、「2つに区分する」というふうに概括的に記述し、後項でどう区分するかを数字を使って具体的に述べている。典型的言い換えの例だと思われる。(14) では、前項でデータの一般的傾向をのべ、後項で詳しくデータを提供

している。(15)も前項において抽象的な「関連している」という表現を使い、後項でその内容を具体的に述べている。

(13)本稿では年齢層を大きく2つに区分し、「青壮年(25～29歳)」「高齢者(60歳以上)」に区分した。(居住者)

(14)平均胸高断面積は60年生ごろまでは各処理区共に秋田地方すぎ林林分収穫表の地位1等と2等の間を推移しているが、それ以降の高齢級においてはむしろ成長率が上昇する傾向にあり、多くの処理区で地位1等の値を上回っていく様子が観察された。(秋田)

(15)営農意識は、経営に前向きな農家は地域社会への関心度が高く、またリーダーシップをとることが多い(澤、1990)といわれるように、地域社会への関与のあり方との関連性が見られる要因である。このことは山林の利用・管理とも関連しており、営農意識が高いほど利用や保全意識が高いことが認められている(山根、1992)。(居住者)

これらの例は前項と後項は等価なので、下記のように前項・後項を入れ替えても意味がほとんど変わらない。

'(13)本稿では「青壮(25～29歳)」「高齢者(60歳以上)」に区分し、年齢層を大きく2つに区分した。(居住者)

'(14)平均胸高断面積は60年生ごろまでは各処理区共に秋田地方すぎ林林分収穫表の地位1等と2等の間を推移しているが、それ以降の高齢級においては多くの処理区で地位1等の値を上回っていく様子が観察され、むしろ成長率が上昇する傾向にあった。(秋田)

'(15)…このことは、営農意識が高いほど利用や保全意識が高いことが認められており、山林の利用・管理とも関連している。(山根、1992)。(居住者)

同存性、独立性があることから、並列に近い用法かと思われるが、概括的→具体的という意味関係があり、やはり並列とは一線を画す。しかしながら、このような例も本調査対象の論文の中ではサンプル数が少なく、どのような述語をとりやすいかを含め、今後さらに調査を要する。

## 5. おわりに

以上のように、農学系論文における連用形接続には前項と後項の関係が、独立性、同存

性を持ちながら、互いに意味的連関を持つような用法がみられた。その意味的連関は本調査では判断→根拠、総括的→部分的（特筆型、例示型）、概括的→具体的とに分かれた。これらは、白川（1990）・吉田（1996）も主張しているが、前項がより抽象的で、後項がより具体的であり、いずれも後項が前項の内容を補うという意味的連関があった。

これらのパターンはいずれも同存性、独立性があるという点では、従来言われている並列の用法に近い。ただし、総括的→部分的〔特筆型〕は前項・後項の入れ替えはできなかった。また判断→根拠では、その前項と後項を入れかえると、根拠→判断の用法に移行してしまった。その意味では、総括的→部分的〔例示型〕と概括的→具体的が並列により近い用法といえる。

また、調査系論文の特徴と思われる連用形接続の使い方も見られた。判断→根拠、総括的→部分的〔特筆型〕である。前項で比較形容表現、または断定的表現を使って、表現主体の判断を示した後に客観的データを示すパターン、また、データの全体的傾向を断定的に述べてから、後項に「とくに」等を付して強調したい点を述べるというパターンは調査系論文の連用形接続の特徴と思われ、これまでの研究では指摘されなかったことであると思われる。

近年留学生を対象とした論文作成・読解のための教科書も次第に出版されるようになった。しかしこのような連用形の用法を扱った教科書は管見の限りでは見当たらない。今後は教科書作成のための基礎資料として各分野でこのような用法も視野に入れた調査・研究の充実が望まれる。

本稿では論文における前項が後項に補足的内容を伴う連用形接続の用法を網羅的に扱えたわけではない。また総括的→部分的〔例示型〕、概括的→具体的では、用例が少なく、正確な記述ができなかったと思われる。さらに調査に使用した論文が森林経営の論文であったため、論者がその分野の専門家ではないことで、内容を正確に分析できないと判断した文は分析の対象から外したためシテ形・連用形接続の用法についての統計的な数字は提示できなかった。専門日本語を扱う場合、やはりその分野の専門家と日本語教育者の協力が必要であると考え、今後の課題としたい。

## 注

- 1) この調査は論者中村（2001）が森林経営の分野の学術論文で使用されている文末表現と文型を 1）「緒言」、2）「材料および方法」、3）「結果および考察」の枠組みごとに調査したものである。しかし、この調査では文末表現に焦点をあてたため、従属節・重なり文の述語については考察の対象外であった。
- 2) 並列について定義しておく。前項で表される事象と後項で表される事象が、共存並立する関係にあり、独立性が高いもの。前項と後項の事象は、同じ時間の中に存在していること〔同存性〕が基本である〔仁田（1995：122）を参照した〕。

- 3) 草薙 (1978: 101-103) は主観的かどうかを形容詞に「～と思う」を付して、同じ状況で使えるかどうかで確かめている。同じ状況で使えれば、主観的ということである。判断形容表現を使った「この本はいい」と「この本はいいと思う」は等価であるが、比較形容表現を使った「あの山は高い」と「あの山は高いと思う」では、後者が自信のない時に用いられ、「～と思う」の有無で使用される状況が異なってくる。したがって、比較形容表現のほうが、判断形容表現より客観的表現ということになる。
- 4) 草薙 (1978) の判断形容表現で使われている「よい」は、「この本はいい」で使われている「よい」である。一方、「あてはまりが好い」の「よい」は「あてはまる割合が高い」という意味に近く、比較形容表現に近いと思われる。

## 参考文献

- 新井 忠 1990 「なかどめ—動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存の場合—」  
『ことばの科学4』 むぎ書房
- 奥田 靖男 1989 「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学2』 むぎ書房
- 草薙 裕 1978 「日本語形容表現の意味—情報提供という観点からの考察—」  
『文藝言語研究』言語篇2 筑波大学
- 言語学研究会・構文グループ 1989 「なかどめ—動詞の第一なかどめのばあい—」  
『ことばの科学3』 むぎ書房
- 白川 博之 1990 「独立性の高いテ形・連用形について」『広島大学教育学部紀要』2部第38号
- 中村 純子 2001 『農学系論文で使用される文末表現と文型—森林経営の論文とその他の農学系論文との比較から』平成12年度信州大学留学生センター日本語研修コース・専門分野の論文読解・作文指導のための調査報告書1-36
- 仁田 義雄 1995 「シテ形接続をめぐる」『複文の研究』上 くろしお出版
- 森田 良行 1982 日本語教育学会編 『日本語教育事典』 大修館書店
- 吉田 妙子 1996 「『言い換え前触れ』のテ形について」『日本語教育』91号 日本語教育学会